

bunka@nagasaki-np.co.jp

事業支えたパートナー

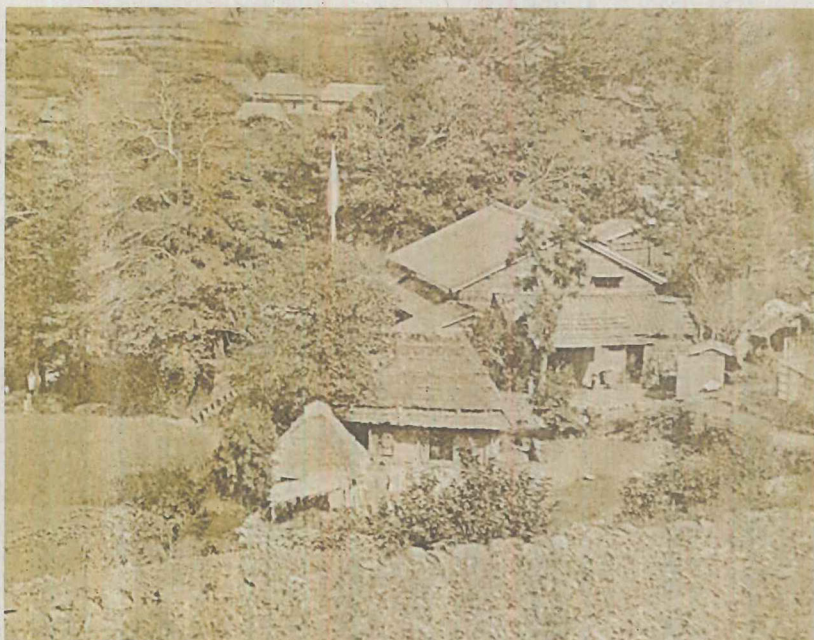
長崎居留地
ドキュメント
ブライアン・バークガフニ

17

グラバーの恩人

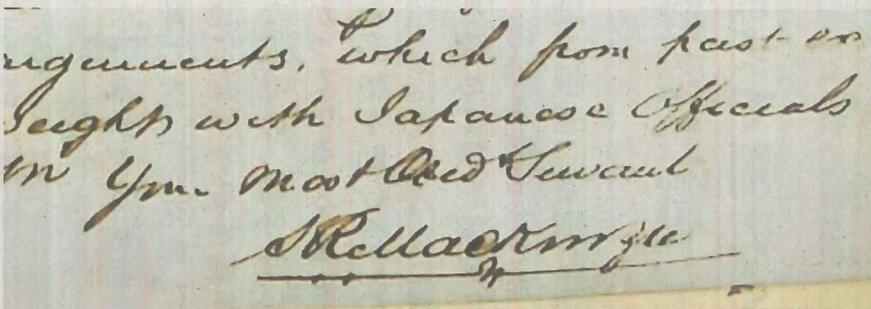
ケネス・ロス・マッケンジーは1801年、スコットランド人の両親の子としてインドのマドラスで生まれた。幼少期をインドで過ごした彼は、1845年ごろに中国の上海に渡り、弟のチャールズと共にマッケンジー・ブラザーズ商会(隆茂洋行)という貿易会社を設立した。

同商会は、中国茶の国内最大級の輸出業者となり、若き兄弟は巨万の富を築いた。上海で5年ほど過ごした後、マッケンジーはロンドンに渡り、悠々自適の生活を送っていた。1855年から1858年にかけて、彼はイギリス女性との間に3人の娘と1人の息子をもうけた。



安政7(1860)年10月、スイス人写真家ヒェール・ロシエが撮影したマッケンジー借用の農家(部分)。庭にはフランス国旗が掲げられている。現在は大浦天主堂の境内。(英国国立公文書館蔵)

子孫にも絆引き継がれる



駐長崎英国領事への手紙に見るマッケンジーの直筆サイン(長崎英国領事館資料)

記録によると、マッケンジーは安政6(1859)年1月、安政五方国条約に



長崎の写真館でポーズをとるクラウ一家。長崎で生まれた子どもたちはその後、海星学校と聖心女学校(マリア園)に通った(筆者蔵)

が、正式な結婚をせず、やがて子どもたちをイギリスに残して中国へ舞い戻った。

よる正式な開港の半年前に長崎に来航し、スコットランドの貿易会社ジャードイン・マセソン商会の長崎支店を開設するための準備を開始した。大浦の長崎居留地予定地を見下ろす浄土宗の寺、妙行寺近くの農家を私邸として借りた。同年夏には、妙行寺内に日本初の英国領事館を設立するのを手伝う一方、フランス領事として居留地区画割りの交渉にも参加した。

マッケンジーが獲得した借地権の中には、文久3(1863)年にトーマス・グラバーが象徴的な邸宅を建てることになる南山手3番地および1番地が含まれていた。現在の旧グラバー住宅所在地である。マッケンジーはまた、英国P&O社の代理人や長崎居留地最初の消防団の団長も務めた。

文久元(1861)年6月、マッケンジーはジャードイン・マセソン商会長崎支店の業務をグラバーに任せて中国へ戻った。2人は

その後も連絡を取り合い、マッケンジーは慶応3(1867)年初めにパートナーとしてグラバー商会に入社し、長崎の離島、高島に日本初の近代炭鉱を開設する一翼を担ったり、グラバー商会大阪支店長を務めたりと活躍した。明治3(1870)年10月にグラバーが破産宣告をするまで大阪に留まったが、やがて長崎に戻り、同6(1873)年11月に病気に倒れて72年の生涯を閉じた。

マッケンジーの3人の娘たちはロンドンで母に育てられたが、いずれも父の足跡をたどり、若いうちに長崎へ来航した。きつかけは、トーマス・グラバーやその他の長崎在住外国人たちからの誘いだったと思われる。長女ヘレンと次女アリスは、それぞれオルト商会とホーム・リンガー商会のイギリス人従業員と結婚した。一方、三女のサラは、大北電信会社の長崎支局長クリスチャン・クラウ(デンマーク人)と結婚し、明治17(1884)年から同30(1897)年ごろまでの13年間を長崎居留地で過ごした。

大浦国際墓地にあるケネス・マッケンジーの墓はその後、無縁墓と化していたが、近年、サラ・クラウの子孫が日本での家族のつながりを知り、長崎を訪れて墓前に献花している。

(グラバー園名誉園長)

月1回掲載します